

【角膜血管新生】

ソフトコンタクトレンズに一度慣れてしまうとその装用感が楽であるため、最初のうちは守られていた装用時間が徐々に長くなり、規定の時間をオーバーしてお使いになる方が非常に多いのに驚きます。しかし、これが後に大きな『しっぺ返し』となって返ってくるのです。

ソフトレンズは材質上、酸素を眼に供給できる量が非常に少ないレンズです。特に最近若い方を中心に使われているカラーコンタクト(カラコン)に至っては、酸素を通す量がほとんど『0』に近いレンズです。

このように、酸素が十分に眼に与えられない環境が長時間続くと、眼が慢性的な酸素不足の状態に陥り、角膜輪部(黒目と白目の境目)から角膜中心に向かい、血管が伸びてきてしまいます。これを『角膜血管新生』と呼びます。

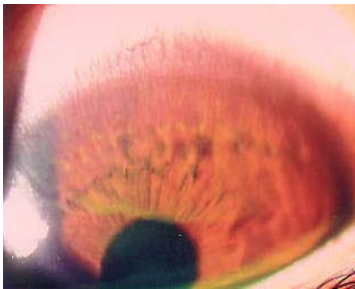


図1:角膜血管新生



図2:角膜浸潤

この角膜血管新生自体では、全く症状を伴うことは全くありません。従ってこれによる直接の苦痛を患者さんが訴えることはありません。しかし、これが最も危険な眼の状態であるのです。この血管新生が極端にひどくなると、数年経過した後に血管の伸びた角膜が白く濁ってきて(『角膜浸潤』)、しまいには黒目が段々小さく消えていってしまいます。こうなってしまうと改善の見込みが無くなり、視力障害をきたす可能性があるのです。

よって、ソフトコンタクトレンズをお使いになる場合には常に角膜に血管が伸びてきていないかどうかをチェックすることが重要なのです。そのため、定期検査を受け、角膜血管新生の有無をチェックしてください。また、この血管新生は慢性的な酸素不足が原因であるため、酸素透過性の低いレンズ装用だけでなく、ソフトレンズを長期間装用されている方や、連続装用の使い捨てなどのように眼にレンズが長時間載っている状態でも見受けられます。

つまり、ソフトレンズは上手にお使いいただいても15年～20年たつと、必ず眼は危険な状況になってしまうのです。

角膜血管新生が軽度であれば、酸素透過性の高いレンズに換えて、装用時間を短くすることで対処できますが、高度に伸びた場合にはハードレンズの様に酸素をさらにしっかり通すレンズに換えるしか対処できません。酸素を十分に与えることで、血管の中を流れる血液が枯れて、線だけが残るようになります。これを『ghost vessel』といい、将来黒目が濁ってしまう心配はなくなります。

ソフトレンズの大きな『しっぺ返し』は足音をたてずに忍び寄ってきます。日ごろからレンズの装用時間に注意を払い、できれば酸素透過性の高いレンズをお使いになり、定期的に血管新生の有無のチェックを受ける事を忘れずにいてください。